

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



## “テロリストに乗っ取られた”JR東日本の真実”

### 「マングローブ」ダイジェスト版 第20回・最終回

あの「週刊現代」連載記事が【マングローブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

#### インタビュー (5) 革マル派の学園支配を断ち切った8年間の闘い

前早稲田大学総長・奥島孝康氏

JR東日本ではここ20年の間に、JR東労組の方針に従わなかった社員が、同じJR東労組の組合員から「組織破壊者」のレッテルを貼られ、集団で吊るし上げられ、組合から脱退、果ては退職にまで追い込まれるという事件がいくつも発生している。しかも、現場の管理者が「組合怖さ」に見て見ぬふりを決め込んでいるため、治外法権がまかり通り、職場秩序は完全に崩壊しているのだ。奥島氏が続ける。「治外法権は、早稲田でも同様でした。それまで早稲田には『大学の自治を守るため』、『学問の独立を守るため』という大義から、警察を大学構内に入れないという不文律がありました。革マル派はそれをいいことに、学内で傍若無人の限りを尽くしてきた。そしてそれは早稲田に深刻な『教育現場の荒廃』を引き起こしたのです。大学といえど、市民社会の一員です。『治外法権』であっては決してならない、だから私は理事会で、『大学で暴力が発生したら、即座に警察官の導入を要請する』と宣言した。一方、奥島氏によって徹底した追放作戦を展開された革マル派も猛反撃に出た。奥島氏が再び語る。「法学部長から総長に就任したころまでは、自宅に一日中、脅迫電話がかかってきました。総長になってからの2年間は無言電話。自宅前のアパートの2階からは、彼らがずっと見張っていた。幸い、うちの家族は神経が大かったのか、なんとか耐えてくれましたが、家族から攻めてくるのが、彼らのやり方なのです。奥島氏が続ける。「実は先代の総長たちは授業を持っていなかったんですが、私は現場の感覚を失いたくなかったから、総長を務めていた8年間も4コマの授業を持っていました。授業のために外に出ると、彼らがやってきて取り囲むわけです。いちばん長いときで、大隈銅像前の壇上に、午前10時半から午後5時半まで7時間立たされたこともあります。片足に2人ずつ、計4人で私の足を押さえつけ、トイレにも行けなかった。でも、私は絶対に逃げなかった。彼らは逃げれば追ってくる。30年もの革マル派支配に、みんなもう、うんざりしていたのです。革マル派も30年でいい気になりすぎていたのでしょう。どんな組織でもそうですが、彼らと闘うなら、身を捨てる生き方を誰かが実践し、それをバックアップする人間がいればいい。必要なのはこの2つなのです」その結果、早稲田大学は革マル派追放に成功した。「今でも、革マル派系の学生サークルはあります。しかし私は決して、彼らの『思想』を問題にして、追放したのではない。不法、不当なことをするから、追い出したのです。だから彼らが普通の学生生活を送る限り、彼らの『自由』も当然、守られるべきなのです」「ただ……」と奥島氏は続ける。「初めに言ったように、私は『革マル派問題』については楽観していない。私が総長を退いてからすでに4年が経ち、早稲田でも彼らに対する危機感が薄れつつある。彼らは学内に入れただけで、確実に勢力を取り戻しつつあるからです。というのも、たしかに早稲田における、彼らの資金源は断った。しかし彼らは、別のご立派な資金源を持っている。その資金源を断たない限り、彼らはいつでも復活すると思います」奥島氏の言う「立派な資金源」が、暗にJR東日本を指していることは言うまでもない。

【マングローブ（講談社）P.326～P.331】